

2-4.宿泊施設の容量調査

1)調査方法

(1)目的

道央、道南、道北、道東の主要市町村における、時期別の宿泊施設の稼働状況及び個人旅行者向けの宿泊施設の現状を把握・整理したうえで課題を抽出した。

(2)調査対象と手法

基礎調査として、北海道保健統計年報から北海道の宿泊施設を旅館とホテルに分けて、その施設数と客室数の推移、ならびに主要都市別の宿泊施設数と客室数を調査した。

本調査として、観光庁のデータを利用して、主要市町村別に旅館とホテル（リゾートホテル、ビジネスホテル、シティホテルに区分）の月別平均客室利用率を抽出し、月別平均客室利用率が80%以上の月数と80%未満から50%以上の月数、50%未満の月数を3段階に分類してカウントし、主要市町村の宿泊施設の混雑度を測定して比較検証を行った。尚、月別平均客室利用率と混雑度の関係を次のように定義した。

表-37 月別平均客室利用率と混雑度の関係

月別平均客室利用率	混雑度
80%以上	平日、週末を問わず混雑しており、個人旅行の予約は可能だが、団体旅行の予約は困難である。
80%未満から 50%以上	週末は混雑しているため団体旅行の予約は困難な時があるが、平日は客室に余裕があり予約が可能だ。
50%未満	平日、週末を問わず客室に余裕があり、団体旅行、個人旅行ともに予約は可能である。

追加の調査対象として、訪日外国人旅行者の個人旅行者が利用するゲストハウス、ビジネスホテル、高級旅館、さらに北海道の大手チェーンホテルを対象として訪日外国人観光客に関する現状調査を行った。

2)調査結果

(1)客室数

北海道保健統計年報より、平成20年度末から平成24年度末までの5年間の旅館・ホテルの施設数と客室数を抽出しその推移を次の図にまとめた。

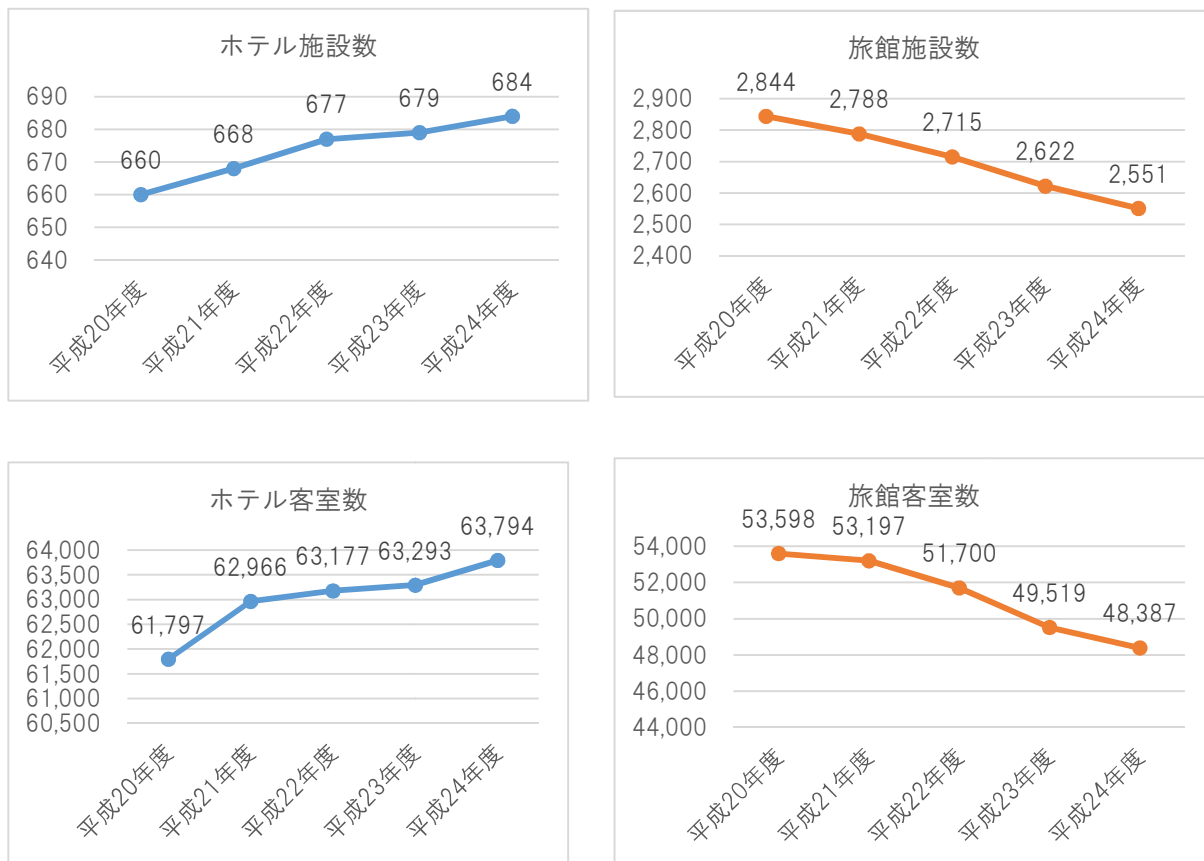


図-4 旅館・ホテルの施設数と客室数の推移

北海道全体のホテルは、施設数、客室数が一貫して増加傾向にあり、旅館は、施設数、客室数ともに減少傾向にある。次に、平成 24 年度末の札幌市など主要市町村の施設数と客室数を抽出し次の表にまとめた。

表-38 札幌市など主要 7 市 6 町の施設数と客室数

	旅館数	ホテル数	旅館客室数	ホテル客室数
北海道	2,551	684	48,387	63,794
札幌市	99	171	3,456	24,950
登別市	37	2	2,350	47
洞爺湖町	29	4	1,005	575
倶知安町	111	21	1,938	910
ニセコ町	47	5	503	1,047
函館市	108	90	3,062	6,488
旭川市	90	23	1,746	3,039
富良野市	45	9	527	997
上川町	25	0	1,759	0
釧路市	89	26	2,139	3,323
音更町	36	2	1,215	50
網走市	32	14	960	767
斜里町	36	3	1,457	215
7 市 6 町合計	784	370	22,517	42,408
7 市 6 町のシェア	31%	54%	46%	66%
札幌市のシェア	4%	25%	7%	39%

旅館が減少し、ホテルが増加している傾向にあるが、これらの 7 市 6 町に北海道のホテル数の 54%が集中し、客室数にいたっては 66%が集中している。その中でも札幌市のホテル客室数は全体の 39%を占めていることが判った。また、倶知安町は、旅館客室数がホテル客室数の 2 倍以上になっているが、ニセコ町は、その逆でホテル客室数が旅館客室数の 2 倍になっている。特にニセコ町のホテルの 1 軒当たり客室数は 200 室以上となっており、大型施設が多いことが判った。

(2)時期別稼働状況

主要市町村における宿泊施設の月別平均客室利用率を次のようにまとめた。

表-39 主要市町村の月別平均客室利用率

	ホテル/ 旅館	月別平均客室利用率 (%)												80% 以上	50 以上 ~ 80 未満	50% 未満
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月数	月数	月数
北海道	リゾートホテル	49	49	43	24	36	47	59	64	54	46	30	50	0	4	8
	ビジネスホテル	56	67	58	53	60	72	79	79	78	72	63	59	0	12	0
	シティホテル	60	76	63	54	71	81	85	86	83	78	67	68	4	8	0
	旅館	41	49	39	27	39	49	61	62	57	55	45	42	0	4	8
札幌市	リゾートホテル	42	46	37	65	66	82	75	67	59	52	42	46	0	7	5
	ビジネスホテル	65	81	68	61	71	82	86	86	87	78	70	67	5	7	0
	シティホテル	66	84	70	60	77	84	86	86	84	81	72	77	6	6	0
	旅館	67	70	65	50	55	63	75	81	72	73	65	66	1	11	0
登別市	リゾートホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ビジネスホテル	44	53	49	51	54	56	57	50	77	60	54	54	0	10	2
	シティホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	旅館	64	63	58	48	60	62	71	78	69	79	72	73	0	11	1
洞爺湖町	リゾートホテル	50	52	50	46	74	73	87	89	89	86	87	85	6	5	1
	ビジネスホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シティホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	旅館	47	65	60	50	71	74	86	93	78	89	66	65	3	8	1
倶知安町	リゾートホテル	72	77	72	30	28	33	32	54	37	40	14	63	0	5	7
	ビジネスホテル	80	83	85	80	65	76	82	81	84	80	83	84	10	2	0
	シティホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	旅館	75	80	49	7	15	15	19	27	17	7	0	48	1	1	10
ニセコ町	リゾートホテル	79	84	70	10	20	25	33	45	30	34	21	61	1	3	8
	ビジネスホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シティホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	旅館	36	34	29	8	23	32	45	60	46	63	52	48	0	3	9
函館市	リゾートホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ビジネスホテル	22	30	31	41	53	53	47	48	44	53	38	33	0	3	9
	シティホテル	30	38	38	24	57	62	59	80	71	65	43	52	1	6	5
	旅館	35	33	41	24	31	38	76	85	73	55	42	45	1	3	8

	ホテル/ 旅館	月別平均客室利用率 (%)												80% 以上	50 以上 ~ 80 未満	50% 未満
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
旭川市	リゾートホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ビジネスホテル	56	67	50	45	53	72	82	80	75	78	62	57	2	9	1
	シティホテル	63	77	59	46	70	88	97	93	92	84	60	60	5	6	1
	旅館	29	26	19	36	36	58	78	74	76	59	38	56	0	6	6
富良野市	リゾートホテル	73	62	57	15	36	71	91	83	79	51	15	50	2	7	3
	ビジネスホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シティホテル	51	57	39	32	58	75	95	91	75	66	36	65	2	7	3
	旅館	41	46	36	17	23	42	80	46	18	50	41	49	1	1	10
上川町	リゾートホテル	5	4	7	—	—	—	87	94	90	34	13	3	3	3	6
	ビジネスホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シティホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	旅館	41	62	50	29	46	59	86	69	69	53	43	33	1	6	5
釧路市	リゾートホテル	45	82	60	44	70	69	49	65	76	86	65	31	2	7	3
	ビジネスホテル	57	64	65	49	56	74	83	90	86	76	66	60	3	8	1
	シティホテル	35	43	41	32	41	64	69	79	71	56	45	35	0	5	7
	旅館	45	62	39	25	36	50	59	58	61	61	49	37	0	5	7
音更町	リゾートホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ビジネスホテル	61	67	58	62	52	78	85	84	84	85	76	55	4	8	0
	シティホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	旅館	42	52	38	21	38	42	73	76	72	68	52	50	0	7	5
網走市	リゾートホテル	19	29	18	11	20	27	29	48	27	15	9	17	0	0	12
	ビジネスホテル	40	59	43	34	41	52	64	61	57	46	31	28		5	7
	シティホテル	49	60	44	43	46	58	81	81	75	56	49	43	2	3	7
	旅館	26	41	24	14	27	34	67	62	56	32	20	19		3	9
斜里町	リゾートホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ビジネスホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シティホテル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	旅館	33	62	33	25	43	68	74	84	76	64	36	22	1	5	6

時期別の稼働率の地域別特徴として次の点が上げられる。

【札幌市】

平均客室利用率が80%以上となる月が多く、50%未満に下がる月は少ない。札幌市はほぼ通年で

予約の難しい状態になっていると考えられる。

【倶知安町】

ビジネスホテルの平均客室利用率が年間を通じて 80%以上になっているが、リゾートホテルや旅館は 50%未満になることがほとんどである。

【函館市】

8 月を除けば平均客室利用率は 50%未満になるときがほとんどである。

【道北地域】

旭川市、富良野市は、7 月～9 月が年間のピークになりホテルの予約は厳しい状態が続く。ホテル業界は 3 月、4 月を除けばほとんどが 50%以上の客室利用率となっている。一方、旅館業界は夏場を除いて客室利用率が 50%未満になるときが多い。

【道東地域】

夏の時期を除けば、平均客室利用率は 50%未満の状態にある。

(3)個人旅行者の宿泊施設

ビジネスホテル、ゲストハウス、日本旅館、高級旅館からのヒアリングを次のようにまとめた。

種類	軒数	外国人宿泊者の特徴的な季節波動	インバウンド比率
ビジネスホテル	6	春節の時に多くなるが、それを除けば特に日本人旅行者との違いはない。	5%から 10% 受入の制限はしていない。 1 軒のみ団体のみ人数によって制限を設けている。
ゲストハウス	2	特に違いはない。豪州人は 1 月、2 月に急増する。	それぞれ 50%、70～80%で、札幌市内のゲストハウスは外国人比率が極めて高い。受入の制限はない。
ユースホステル	1		3% 受入の制限はしていない。
日本旅館	1	特になし	15% 受入の制限はしていない
高級旅館	2	特になし	それぞれ 10%以下、19%だった。 受入の制限はしていない。

(4)北海道の大手チェーンホテル

北海道の大手チェーンホテル5社に訪日外国人旅行者の状況やチェーンホテルとしての方針などをヒアリングし、4社分についてその内容を次のようにまとめた。尚、1社については面談をすることができず、ヒアリングはできなかつた。

	日本人旅行者と季節波動の違い	国、地域の特徴	客層別の特徴	オフ期の取り組み	FITについて	営業戦略	新幹線開業について	Wi-Fi、ハラル外国入研修制度	課題その他
チェーンホテルA	<ul style="list-style-type: none"> アジア系の旅行者が中心で比率は以前4割だったが最近2割に落ちた。 一日当たりの受け入れ本数を制限している。 人数よりも単価を重視する。 	<ul style="list-style-type: none"> タイやインドネシアは東京からの予約が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 特にない 	<ul style="list-style-type: none"> 特にない 	<ul style="list-style-type: none"> FITが増加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 施設ごとの営業戦略を重視し、チェーンの客室をセット販売する取り組みはしていない。 MICEへの仕掛けは考えていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 特に意識はしていない。 	<ul style="list-style-type: none"> Wi-Fiは客室でも使用できる。 食材表記はレストランでは対応しているがハラルまででは対応していない。 外国人研修制度を活用している。 	<ul style="list-style-type: none"> 免税店登録をしている。 Webから予約をし、その後で団体料金の通用を要求されるが基本的にはお断りする。
チェーンホテルB	<ul style="list-style-type: none"> 団体が中心で3割を目標の基準にしている。 国別にバランスをとるような取り組みはしていないが、1国1エージェントを前提にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> タイからの旅行者が急増し、中国は受けきれない。 	<ul style="list-style-type: none"> 富裕層はオンラインから予約してくる。香港、タイ、韓国が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域としての取り組みは難しい。 チェーンホテルを広域に利用していただく施策を実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> これからはFITの拡大を望む。 	<ul style="list-style-type: none"> イールドマネジメントによる一元管理が重要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 新函館北斗駅からのバス輸送を検討している。 東北地方から修学旅行の誘致を期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> Wi-Fiは客室でも使用できるが、湯の川はロビーのみしか利用できない。 外国人研修制度は活用していない。 新卒で外国語対応ができる人材を採用している。 言語表記は英語にしている。 ベジタリアンの対応はするが、ハラル対応は特にしていない旨を説明して理解をいたしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 免税店はまとめ買いで売り上げは好調だ。 フロント業務のIT化が進んでいる。 アマゾンで購入した商品ホテル気付にする旅行者がいる。 観光地のインフオメーションセンターを充実させる必要がある。
チェーンホテルC	<ul style="list-style-type: none"> 月によって25%になるが平均すれば22%程度だ。 国別のバランスを設定していないが中国の団体は抑制している。 	<ul style="list-style-type: none"> マレーシア、インドネシア、タイの伸び率が大い。 タイは価格指向で動く傾向がある。 中国はガイドのツアー買い取り制があるため、無理難題のオーダーが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 中国からの富裕層はプライベート機で訪れ2、3泊をして帰る。 	<ul style="list-style-type: none"> 層雲峡や道南は地域内での連携ができるが、道央地域では難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 台湾のFITの増加が目立つ。 	<ul style="list-style-type: none"> グループのホテルを利用するエージェントは優遇する。 MICEに特化した営業はしない。 	<ul style="list-style-type: none"> 道央地域はもろろ層雲峡までの好影響を予想する。送迎バスを検討している。 	<ul style="list-style-type: none"> Wi-Fiの環境整備が企業任せになっている。 ハラルの対応を求められる事例がなく、必要性が低い。ピクトグラムの推進と要請に応じて指定された食材を除いている。 外国人研修制度は活用するが、新卒の採用でも対応している。 	<ul style="list-style-type: none"> 札幌市内の宿泊キャパシティが限界にある。 バスの新運賃制度の時間制と距離性の併用は地方にとってマイナスの影響が大きい。 免税店の効果は高級ホテルほど大きい。 Web予約で団体対応を求められるがお断りする。
チェーンホテルD	<ul style="list-style-type: none"> 20%以下 	<ul style="list-style-type: none"> 欧米がいると施設の雰囲気が高質になる。 	<ul style="list-style-type: none"> 客単価のアップは客層の質のアップにつながつている。 	<ul style="list-style-type: none"> オフ期ではなく、春節などのピーク期には青田防止のために情報共有をして前広な取り組みを行い成果が出ている。 	<ul style="list-style-type: none"> 新千歳空港からタクシードくる。 	<ul style="list-style-type: none"> チェーン優先ではなく、地域のことをまず優先に考えた上で、地域の一番店を目指している。 	<ul style="list-style-type: none"> (特にコメントは得られなかった) 	<ul style="list-style-type: none"> Wi-Fiは環境整備をしているが、ハラルなどには相手側の要請や希望に柔軟に対応している。大きく身構えることはない。 	<ul style="list-style-type: none"> 道東地区にも海外旅行者向けショッピングの場が必要になってきた。

3)課題分析

各地のヒアリングでだされた宿泊地の確保に関する意見を、地域の実情や問題点として地域別に整理し、宿泊施設数と客室数の推移、主要市町村の月別平均客室利用率、個人旅行者の宿泊施設、北海道の大手チェーンホテルの調査結果から宿泊地の容量に関する課題を次のようにまとめた。

(1)道央

①地域の実情や問題点

- ・ 1年の3分の2以上が月平均80%という稼働率では、団体旅行を受けにくい状態になっている。
- ・ 札幌市内の宿泊予約は困難になってきた。年間を通して9割に届くほどの稼働率のため、土曜日は通年で部屋の確保は厳しく、6月から9月は平日も厳しい状態になる。インバウンド客は取らないというホテルもある。
- ・ ここ3年は好調だが、それ以前は宿泊単価が低く蓄えがないため設備投資ができない。やっと改修が始まったという感じ。そこへ耐震診断の問題は追い打ちである(札幌)。(耐震診断に関する意見は他にもある)
- ・ 7月から9月は、予約の受付は大変厳しい(千歳)。
- ・ FITは、ホテルなどを予約せずにくる場合があるが、千歳のホテルが取れない、
- ・ 夏は国内客、冬は外国人客が多いが、千歳市の宿泊施設が不足している(千歳)
- ・ 今後の日本人とのバランスを危惧する。団体客はバランスを取れるが、FITの増加によりコントロールができるかどうか課題になってきた(登別)。
- ・ 宿泊室数は7千から8千室になっているが、冬季はパンク状態になる(ニセコ)。

②現状の分析

宿泊施設の容量が不足しているという札幌市、千歳市、倶知安町、ニセコ町の状況を調査した。

●札幌市

札幌市のホテル客室数は慢性的に不足しており、特に、訪日外国人旅行者の団体旅行は、部屋の確保に苦労しているのが現状である。日本人旅行者にも訪日外国人旅行者にとっても札幌市、登別市、洞爺湖町は北海道観光の中心地であり、その中でも札幌市は道都であり交通の要であり、そして北海道ではただ一つの都市型観光の魅力に溢れた観光地である。その札幌市における平均客室利用率で8割を超える月数は、ビジネスホテルで5ヵ月になり、シティホテルで6ヵ月になる。団体旅行の宿泊確保は慢性的に難しい状況にあり、個人旅行者にとっても、夏のトップシーズンや雪祭り、春節の時期は予約が難しいものになってきた。札幌市のホテル客室数は増加しているが、日本人旅行者の増加と訪日旅行者の急激な伸びに対応できていないと予想される。その為、宿泊単価の高い日本人旅行者や個人旅行者を優

先にしたいホテルの営業方針もあり、割安なグループ料金を求める訪日外国人旅行者は、札幌市内の宿泊がとれず、一部は札幌市郊外や登別温泉、洞爺湖温泉そして夏のシーズンにはニセコまで代案を求めて移動をしている状態がある。

●千歳市

ホテルの客室数不足は、千歳市にも札幌市の影響が飛び火している。特に千歳市は LCC の就航により新千歳空港に遅く到着する旅行者や早い時間に出発する旅行者からの宿泊需要が増加しており、客室数の不足が発生している。冬期は、ニセコを結ぶゲートとしての需要が高く、ニセコへ行くための前泊、ニセコから戻ったあとの後泊に利用しているという。

●ニセコ

ニセコは、豪州人旅行者に加えて欧米人旅行者、アジア系旅行者が大きく増加しており、冬期の客室数は不足の状態が続いている。一方、夏期はアジア系の団体客対応にサービスを変更するために言語や食事、料金、サービス、マナーなどの問題が起きている。

③課題

●札幌市の宿泊施設の容量拡大

訪日外国人旅行者にとって現在の航空ルートや都市型観光の魅力から札幌市の宿泊需要が衰えることはない。宿泊がとれないために北海道旅行を中止することは北海道の広範囲にマイナス影響を与えるため、宿泊施設の容量拡大は、北海道観光全体にとって重要な課題と推測される。

(2)道南

①地域の実情や問題点

- ・ 台湾のエージェントの話では、宿泊施設が飽和状態にあり、観光客が函館から洞爺湖や登別温泉に流れるなど、宿泊確保が困難になっている。新幹線開通により、益々厳しい状況になる。
- ・ オンシーズンは、GWから10月になる。国際線の運航により、土曜日と日曜日は台湾人で混雑しているが、中国線の運航によって月曜日と金曜日に分散すると予想できる。
- ・

②現状の分析

宿泊施設の容量は、平均客室利用率から見る限り8月を除き逼迫した状況ではない。但し、ヒアリングの意見にあった台湾のエージェントの話によると宿泊施設が飽和状態にあるという状況は、その背景に次の要因が考えられる。

1. 台湾人に依存していること…平成25年度の函館市の訪日外国人の宿泊客延べ数は30万人だが、その内台湾人旅行者の宿泊延べ数は22万人におよび72%を占めている。
2. 日本人観光客に人気が高いこと…北海道観光の玄関口であり歴史的にも幕末以降の建

造物や函館山からの夜景観賞など魅力的な観光資源があり安定した需要がある。

3. 宿泊施設数、客室数が伸びていないこと…平成 20 年度以降、ホテル施設数と営業客室数は伸びているが、旅館施設数と営業客室数は大きく減少したことがわかる。客室数の単純比較では、平成 20 年度 9,922 室数から平成 24 年度 9,550 室数と 300 室数以上が減少している。

函館市	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
ホテル営業施設数	87	86	89	90	90
旅館営業施設数	127	123	117	113	108
函館市	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
ホテル営業客室数	6,327	6,265	6,359	6,380	6,488
旅館営業客室数	3,595	3,501	3,353	3,326	3,062

このような状況で、日本人旅行者の動きが活発になると日本人に提供する客室数が増加し、台湾の旅行者に提供する客室数が減少する。国際線の就航とともに急激に増加した台湾人旅行者への必要な客室数が、施設側が用意した一定の客室数の中で飽和状態になったと思われる。(参考数値：台湾人宿泊延べ数平成 25 年度 216,106 人、平成 24 年度 187,924 人)

③課題

●函館市の宿泊施設の容量拡大

来春の函館新幹線開業や平成 27 年の中国からの国際チャーター便の就航など交通機関のアクセスが大幅に拡大される中で、ホテルや旅館の客室数を増加することや他地域への分散が喫緊の課題になるとと思われる。

(3)道北

①地域の実情や問題点

- ・ 宿泊は、外国人なしではやっていけない。今年の春節では一時ホテルが取れない状況に陥ったが、新しいホテルができて客室数が 660 室に広がっていくので、改善されると思う(旭川市)。
- ・ 宿泊予約を断ることは、7月のラベンダーの時期や9月の紅葉時期ぐらいだ(上川町)。
- ・ 美瑛地区は、宿泊者は少なく通過型の観光地になっている。7月、8月はピークで予約はとれない(美瑛・富良野)。
- ・ 宿泊のキャパシティが少ない(稚内)。

②現状の分析

自然、景観、テーマパークなど大雪山、層雲峡、富良野と美瑛、旭山動物園という観光資

源に恵まれたこのエリアは、旭川市をゲートとした通年観光の伸びる要素があると考えられる。また、平成 27 年は北海道ガーデンショーが開催され、新旧の観光資源が上手く連動している特徴が見受けられる地域でもある。交通面では、札幌市や新千歳空港からの利便性が高く、グリーンシーズンの客室利用率も高いことが判る。

③課題

●周辺地域への分散

旭川市、富良野市周辺には、上川町の層雲峡温泉、東川町の旭岳温泉、美瑛町の白金温泉があり、それらを結ぶ二次交通を整備することで夏期の混雑度を分散させることが可能だと推測される。また、ペンションやオーベルジュなど小規模宿泊施設の活用も分散化のための手法として検討する価値があると推測される。

●閑散期対策

冬の新しいコンテンツが未開発であり、外国人目線での発掘が必要と考えられる。

(4)道東

①地域の実情や問題点

- ・ トップシーズンは満室の状態にある。
- ・ オフシーズン対策として、道央圏から道東方面に広域観光させるためには、十勝は道東の出入り口で役割が大きい（帯広）。
- ・ 今年は2月の春節と流氷シーズンにインバウンドが集中し宿泊者数が圧倒的に多かった。
- ・ 来年2月1日春節以降の集中が心配である(釧路・阿寒)。
- ・ 道央とは違い、十分に宿泊受入の余地がある(釧路・阿寒)。

②現状の分析

月別平均客室利用率が8割を超える月が年間で2、3回しかなく、ほとんどの月が5割未満の客室利用率になっている。グリーンシーズンと流氷は魅力ある観光資源として大きな集客力をもっているが、その期間が短いことがネックになっている。また、観光地間の移動距離が長いため、一日の行程の中で観光できるハイライトが少なく、旅行の満足度が低下した状態にある。

また、釧路市のホテルの施設数と営業客室数が減少し、平成 24 年度には旅館の営業客室数が増加している点が他の地域と異なる特徴がある。

釧路	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
ホテル営業施設数	36	37	37	33	32
旅館営業施設数	198	193	190	187	186
釧路	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
ホテル営業客室数	4,108	4,217	4,217	3,712	3,696
旅館営業客室数	4,209	4,084	4,080	3,992	4,172

参考：平成 23 年度のホテル営業客室数の減少は釧路市内大型ホテルの廃業による。

③課題

●客室利用率の改善

観光地間の連携により交通アクセスを改善し、一日当たりのハイライトを増やし、旅行の満足度を高めることすなわち観光効率を高めることが必要ではないかと思われる。

●冬期集客対策

夏期だけの営業でなく通年営業が出来るように、流氷観光以外の魅力を強化することが必要ではないかと思われる。

(5)全道

以上のことから、北海道全体としての宿泊施設の容量に関する課題を3つの偏りというキーワードで次のように整理した。

偏り1. 客室利用率の地域間の偏り

<状況>

道央地区の客室利用率は8割以上の月が多く5割未満の月が少ない。
道南、道北、道東は5割未満の月が慢性的に多い。観光客のボリュームにおいて道央地域に偏りがあり、地域間に大きな格差があることを示している。

<課題>

旅行者の分散

道央地域から道北、道東地域への旅行者の分散に、受け入れ環境の整備やプロモーション戦略の転換が必要である。特に函館新幹線開業の効果を道北と道東に旅行者の分散を図ることで、地域の客室利用率を高めることが必要ではないかと思われる。

偏り2. ホテルと旅館の偏り

<状況>

北海道全体のホテルは施設数と客室数ともに増加傾向にある。その中でも、ホテル数は全体の25%が札幌市に集中し、客室数は39%が札幌市に集中している。MICEや大型イベントなど都市型観光の高い需要もまた、札幌市に集中している。

北海道全体の旅館は減少傾向にある。宴会中心の旧来型温泉観光の衰退と後継者不足などの問題に直面し、客室数の減少に歯止めがかかっていない。

<課題>

旅館の活性化：

1泊2食付というサービスの見直しやサービスの簡素化、泊まる施設から交流の施設などへの転換などを、ゲストハウスやユースホステルの事例を参考にしながら、旅館の価値の再生と活性化が必要になっていると思われる。

偏り 3. 観光客の季節波動の偏在

<状況>

道央地域はその圏内に都市型観光の札幌と冬型リゾート観光のニセコがあることから、その地域内では季節波動のバランスがとれている一方、その他の地域はグリーンシーズンに集中し、冬期に落ち込むという観光客の大きい季節波動がある。

<課題>

冬期の価値創造：

外国人の求める観光資源を追求し、特にボトムスの4月と冬期の観光の価値創造を図ることが課題ではないだろうか。パウダースノーを求める外国人は、ニセコ、テイネ、フラノ、旭岳へと流動している。また、イギリスやアメリカ、オーストラリアからバードウォッチングのために厳しい冬季に道東を訪れている。日本人が気づいていない観光資源の発掘による価値創造が必要ではないかと考えられる。

最後に、2020年の訪日外国人旅行者2千万人時代を考える時に、旅行市場人口の予測をしながら、日本人旅行者の増減動向をどのように想定するかが重要なポイントであると思われる。日本人旅行者が順調に伸びて行くときには、訪日外国人旅行者へ提供される客室数は減少をして行く。日本人旅行者が現状の水準を維持して行くとすれば、道央地域は客室数の不足問題がより顕在化してくるだろう。日本人旅行者が減少していくとすれば、旅館数の減少傾向に一層拍車がかかると思われる。